［メルディア］

一般財団法人メルディア広報誌

MELDIA

●知的障がい者と共に

働くこと

●知的障がい者と共に

創ること

大矢真那による取材　障がい者を応援！　いきいきと働こう！

コミュニティーカフェ **よこまち×大矢真那**

布施 博による取材　布施博が訊く

キッズピアあしかが ×布施博

人気連載エッセイ　知的障がいのある息子と私

水越けいこの「M size ／はじまり」

月刊メルディア
VOL.7
TAKE FREE

MELDIA | 2018 JUL. | VOL.7

月刊メルディア　7月号　2018年5月25日発行（毎月1回25日発行）第7号 通巻7号
発行所／一般財団法人メルディア事務局　〒163-0632 東京都新宿区西新宿 1-25-1 新宿センタービル 32F

TAKE FREE

大矢真那による取材
Ohya Masana's Interview

知的障がい者を応援　栃木県足利市

カフェ併設の就労継続支援施設は地域に根差した「ふれあい」スペース

足利市の社会福祉法人が運営するカフェは、市の建築景観賞を受賞したとてもおしゃれな空間だ。出されるコーヒーも豆からこだわり、スイーツやランチ・メニューもバラエティーに富んで、近所の人が多く集まり、評判だという。そんな空間だからか、スタッフとして働く知的障がい者の顔つきも明るく、温かい。この施設を運営する意義や目的など、管理者である柏瀬旬氏に、大矢真那が話を聞いた。

カフェだけに留まらない多様な体験もできるスペース

大矢　さっきこちらのスイーツを頂いたんですが、チーズケーキはチーズの味がしっかりとするし、とても美味しいですね。

柏瀬　ありがとうございます。

大矢　店内は天井も高くて木の温もりがあって、スイーツやパスタ、エスニック料理など女の子が好みそうなメニューも豊富ですね。

柏瀬　例えばガパオを出してみたりと、変わった料理を出すようにしています。田舎の人が今まで食べたことがないようなものをここに来れば食べられるようにしたいので、スタッフみんなで考えてメニューを変えています。

大矢　店内を見るとカラーセラピーだとか、いろいろなイベントの告知もありますね。

柏瀬　催し物はいっぱいやっています。障がいのある人と地域の人たちとが触れ合える場所というのが目的ですから。今年はすぐ近くにある畑で、近所の幼稚園児を呼んで一緒にじゃがいもを植えましたし、去年は芋掘りをしました。

大矢　地域の子どもたちとも触れ合えるし、本当に楽しそうですね。

柏瀬　子供の頃から障がいのある人と接する機会があれば、大人になってからも違和感なく受け入れてくれるようになるんじゃないかと思って。障がいのある人が子どもたちに農作業について教えたりしています。去年はそばを植えて、収穫したら近所の子どもと一緒にそば打ちを体験し、先月はうどんを打ちました。普段では体験できないことをここに来て体験し、そこに障がいのある人が関わる。お互いに教えたり教えられたり、面白いですね。

大矢　もうそうなると、単なるカフェじゃない。

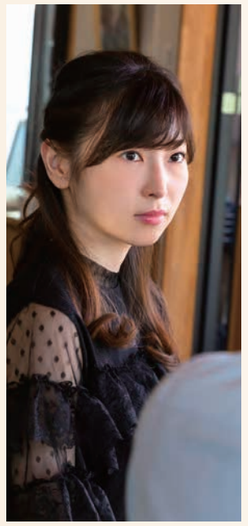
柏瀬　そうですね。毎月何か面白いことをやっています。「体験型コミュニティースペース」という側面が強いかもしれません。

大矢　そもそも、どうしてカフェを始められたんですか。

柏瀬　昭和38年に設立された社会福祉法人 渡良瀬会が母体となります。最初は、障がいのある人が地域で暮らすのが難しい時代に、近くの山の中に入所施設を作りました。そこから地域の中で暮らせるグループホームを作ったりと、いろいろな変遷を経ながら、このカフェを併設した「コミュニティーセンターよこまち」を２０１４年６月に立ち上げました。障がいのある人と地域の人が触れ合う機会は少ないので、ここに来ることで触れ合えるスペースを作りたいと考えたからです。

大矢　どんな方が働かれているんですか。

柏瀬　スタッフの人数は必ずしも固定していませんが、就労継続支援B型の施設として、現在は3名ほどの職員を含めた7名くらいで運営をしています。



足利流こども食堂「ふれ愛よこまち」
6/7、7/5、8/2 開催

大矢　こちらに来るお客さんたちにはどういった人が多いのでしょう。

柏瀬　この地域は老齢人口率が高いので、年配の方が中心ですね。席がご近所の方たちだけで埋まってしまうことも多いです。

大矢　それほどの人気なんですね。

柏瀬　みなさんにはよく利用して頂いていて大変嬉しく思います。

大矢　いろんなことにチャレンジされた結果なんだと思います。今後やってみたいことや課題などありましたらお聞かせ下さい。

柏瀬　基本的には今の活動を継続させながら、ここで働いている人たちが、いろいろなことをもっと体験してくれたら良いなと思っています。実演指導ではないですけれど、一緒にいろいろなことを試していきたいですね。

大矢　障がいのある人は接客には向かないのではないかという意見もあるようですが。

柏瀬　障がいによって向き不向きもありますが、それは我々も同じじゃないですか。だったら、その人に合った仕事をしてもらえばいい。例えば、虫食いやカビが生えたコーヒー豆を選別する作業では、我々だと見過ごしてしまうくらいの個所を、彼らの場合だと一つ一つすごく集中して選別してくれます。それが彼らの強みであるし、彼らの選別のおかげでより美味しいコーヒーが提供できるわけですからね。

大矢　こういう活動をされていて、社会全体に対して何か思うところはありますか。

柏瀬　障がいのある人たちに対する理解がもっと進んでもらえればいいと思います。それも我々の仕事次第だろうと考えています。こういう田舎の小さな所からでも発信はできますから。だから皆さんにも、障がいの有る無しに関わらず、子どもの頃から一緒に楽しいことをやればいいかなって。ところで、一つお聞きしたいんですけど、これまでに大矢さんの周りに障がいのある人っていました？

大矢　はい同じクラスにいました。まだ私たちが子どもだったからか、誰も違和感を感じている人もいなくて、みんなで一緒にワイワイと普通にやっていました。そんな経験があるせいか、柏瀬さんが仰るように、それは大人になってからも変わっていないかなって思います。

柏瀬　小さい頃から関わりがあると、違和感を感じるどころか区別もしなくなる。

大矢　はい。そう思います。

柏瀬　当法人も最初は山の中に施設を作らざるを得なかったと聞きました。50年以上も前のことですから、障がいのある人たちに対する理解の少ない時代でしたし。当時は、障がいのある人は普通教育も受けられなかったと言いますから、ほとんど外部の人の目に触れることさえ無かった。でも今はそんな時代じゃない。そういう意味でも、我々がここで地域の相談の窓口になれるように頑張っていきたいですね。

MELDIA

一般財団法人「メルディア」とは

障がいのある人を支援する活動と、スポーツ（サッカー等）を行う児童・青少年を支援する活動を通じて、人々と社会に広く貢献することを目的として設立されました。

「メルディア」の基本理念

一般財団法人メルディアは社会的・経済的ハンディを抱える方々の「未来」に少しでも希望が持てるように、財団の活動を通じて支援し、社会貢献してまいります。

知的障がい者支援

障がい者の子供を持つ親の苦労や不安は計り知れないものがあります。
さらに、親が「片親」の場合は、経済的負担や苦労・不安もその親1人で背負わなければならない状況です。不安な生活の中で、情報交換もあまりできない方々の情報源となるような刊行誌を定期的に財団で作成し、そういった方々への有益な情報提供と、障がい者の持つ課題等を広く社会に知ってもらうこと、そして様々な企業や個人から、支援団体などに対する寄付を募ることを目的として、本誌「MELDIA（メルディア）」を発行し支援活動を行います。

青少年スポーツ支援事業

家庭の事情等で経済的に恵まれない
青少年のフットボーラーのための奨学制度

アルゼンチンのロサリオ出身のリオネル・メッシは、経済的に恵まれない低所得な家庭に生まれましたが、チームが彼を支援し彼も成長して世界を代表するフットボーラーとなりました。メッシは才能を評価され、たまたま支援を得られました。しかし青少年の中には、才能があっても経済的な家庭の事情で、サッカーをする環境に恵まれずに支援がないまま、選手としてプレイを諦めざるを得なかったり、適切な環境でプレイすることができない人たちもいます。そういう若者が、日本にも数多くいるのが実情です。
そのような青少年フットボーラーがプレイを継続するために、「頑張る人を支える奨学制度」を財団法人メルディアが実施し、社会に貢献をしたいと考えています。

ALL ABOUT MELDIA

「メルディア」とは？

「メルディア」とは、イタリア語である「メダリア」の造語で「メダルを」という意味です。財団メルディアは、『輝かしい人生』を手に入れて頂きたいという想いが込められた名称です。障がい者本人に加えその家族、また経済的な理由からスポーツが続けられない青少年など、「社会的なハンディキャップ」を持つ人々に対して『夢を諦めることなく挑戦することができる』ように支援をしていくことを目指しています。

MELDIA

財団概要

名　称　一般財団法人 メルディア
（英文名：general foundational juridical person MELDIA）
設立者　小池　信三
設立日　2017 年 5 月 23 日
所在地　〒163-0632
東京都新宿区西新宿 1-25-1
新宿センタービル 32F
電　話　03-5381-3213
ＵＲＬ　http://meldia.org/
ＭＡＩＬ　prd@san-a.com

将来の夢はラーメン屋さん
夢を持って今を働く

実際に店内で働くスタッフ・中里巧さん（20）にもお話しをうかがいました。中里さんは特別支援学校の高等部を卒業後、こちらで働き始めて丸2年が経過したそうです。中里さんの仕事内容は、オーダーを受け、出来上がったものを運ぶなど、主に接客を担当しています。

「お客さんが多くいらっしゃった時はやはり大変です。ちょっと焦ってしまったりもします。料理がおいしいと言われると嬉しいですね。スタッフもお客さんもみんな優しいですし、毎日楽しく働いています」（中里さん）

将来は飲食店の仕事に就きたいと言います。

「いつか料理の方も担当できたら良いなと思っています。厨房が忙しい時は調理の補助もしています。小さい頃からラーメン屋さんになるのが夢で、高校生の時に実習に行ったこともあります」（中里さん）

職員として働き始めて4年目という、製菓衛生士の鈴木佑梨さん（23）は中里さんらと一緒に働く感想をこう話してくれました。

「ここで働くまで障がいのある人と接する機会があまりなかったので、最初は戸惑うこともありました。しかし、実際に働いてみると、みなさん素直な方ばかりで、笑顔を見ることができると私も嬉しくなります」（鈴木さん）

柏瀬さんとのお話の中に出てきたコーヒー豆の選別作業を私も体験してみました。

「これとかこれ、豆が割れていたり虫食いだったりします。慣れてくると一目で分かるようになります」（中里さん）

選別作業に関しては周囲の人たちに教えてもらいながら覚えていったという中里さん。私も実際にやってみて、この作業がいかに大変で、集中力が要求されることが分かりました。

みなさんが一緒に体験を積み重ねながら、しかも楽しんでやっていこうという姿勢にほっとした気持ちがしました。

取材・大矢真那

インタビュー中の様子▲
（左、鈴木さん。中央、中里さん。）

▲コーヒー豆選別作業の様子。
選別中はとても集中した様子で、一粒一粒丁寧に作業していました。

平成 26 年度足利市建築・景観賞受賞

コミュニティーカフェよこまち
〒326-0143 栃木県足利市葉鹿町 735-1
TEL / 0284-63-2300
営業時間 / 8:00 ～ 16:30（L.O.16:00）
定休日 / 日曜・月曜・祝日

布施博 × キッズピアあしかが

布施博が訊く

栃木県足利市

地域の子どもたちが集まる「遊び場」施設は知的障がいのある人たちが笑顔で働ける職場

栃木県足利市の郊外型大型スーパーの2階には、地域の子供たちがたくさん集まって遊ぶ施設がある。この「キッズピアあしかが」という施設は、社会福祉法人 足利むつみ会が運営しているものだ。同会が行う障がい者の社会就労サービスの一つとして事業の運営がなされている。そこには、健常者のスタッフと一緒に子供たちと楽しく遊んで働く知的障がい者の姿があった。

キッズピアあしかが

大人も子どもも1人わずか100円。子どもの成長のために考えられた様々な遊具があり、子どもを遊ばせられる「キッズピアあしかが」。

※詳細はP27に掲載

障がい者就労支援施設に多くの親子が列をなす

布施　いやしかし、週末の土曜日ということあるんでしょうけど、たくさんの親子連れが来場されていますね。びっくりしました。

阿由葉　おかげさまで、オープンして3年が経過したんですが、年間で約19万人、累計だと約56万人の方に来場してもらっている計算になります。しかも、足利市だけに留まらず、近隣の市町村から1時間かけて来られる方もいらっしゃいます。社会福祉法人なのでお金を使った宣伝が出来ない中、口コミで評価の声を広げて頂いたみたいで、ありがたいと同時に運営する側として嬉しく思っております。

布施　いろいろな遊具があって、子どもたちがみんな楽しそうに遊んでいますね。どうしてこういった施設を作ろうと思われたんですか？

阿由葉　母体の社会福祉法人では障がい者支援事業を継続して行う一方、介護などの高齢者向けサービスや保育園などの子供向けサービスも手掛けて地域の社会貢献事業を行っています。そこで保育園事業を行うようになってから、足利市が子育て支援の観点から子どもの「遊び場」を作りたいという計画があることを知り、法人として何か役立つことができないかとか検討したことがそもそものスタートです。法人としても、福祉事業だけでなく一般の人たちにも繋がる地域貢献をしていきたいと考えていましたので、良い機会でもありました。

布施　でも、いくら保育園をやっているからとは言え、「遊び場」施設となればまた話は違いますよね。いろいろとご苦労されたんじゃないですか？

阿由葉　おっしゃる通りです。始める前はオープンさせるだけでいっぱいいっぱいで、始めたら始めたで、またどうやったら来場していただいたお客さまに満足して頂けるか、試行錯誤の連続でしたね。しかし、いざ実際に始めてみましたら、当初に想定していたよりも多くの方に利用して頂いて、正直驚いています。

布施 博
Hiroshi Fuse

布施　ロールプレイゾーンやサーキットゾーンとか、いろいろな区画に分かれていたり、変わっていて面白い遊具がありますね。

阿由葉　はい。施設の内容は、36年間に渡って子供の健やかな成長を応援する「あそび道具」と「遊び場」を提供し続けてきたボーネルンド社さんにプロデュースして頂きました。ですから、「体を動かす場所である」というのが大きなポイントとしてあります。また、この事業自体は子育て世代の支援と子供の運動機能の向上・維持、地域の活性化の3点が重要となっていて、商業施設の再利用という目的も含んでいます。実はこの建物もうちがオープンする4年前までは2階部分をクローズしていたんです。そういう様々な観点から、子どもたちが遊びながら成長する中で、我々として地域にどうやって寄与できるかが目的としてあったんです。

阿由葉 洋平
Youhei Ayuha

キッズピアあしかが
http://mutumikai.ecnet.jp/kidspia/

0歳児から子どもを持つ大人を対象にしたイベントも開催される。また、2020年から小学校で授業化されるプログラミング体験も可能。

布施　遊び場の提供だけでなく、いろいろなイベントも開催しているみたいですね。

阿由葉　はい。この施設は6カ月～12歳までのお子さんを対象としていますが、6カ月未満のお子さん向けの「プレキッズピア」や、大人も遊ぶことの楽しさを見つけることができ、また子供との遊び方が分かるようになる大人向けの「大人のキッズピア」というイベントも不定期ながら開催しています。

布施　様々な目的を持って、多様な取り組みをされて、それを提供しているんですね。累計の来場者数と年次の推移をお聞きすると、オープン以後、非常に順調に運営が行われているようです。そもそもは障がい者支援事業ですが、みなさんどのように働かれていますか。

子ども相手の接客もこなし今では欠かせない戦力に

阿由葉　3年を迎えたことで、スタッフ一同自信を持って仕事を全うできていると思っています。施設の形としてはA型就労施設で、ここキッズピアでは定員で10名のスタッフに働いてもらっていますが、全スタッフが一番の目的である「子どもに楽しんでもらう」ということを念頭に、お客さまからも意見を頂戴しながら、日々仕事に励んでくれています。仕事内容としては基本は接客業で、しかも子ども相手ですから、実はオープン前はいろいろな困難があるのかなって危惧する部分もあったんです。ところがいざ一緒に働いてみると、子どもとの接し方などでは私なんかよりも断然上手だったりします。また、性格的にまじめな人ばかりですから、例えば掃除で手を抜くなんてこともなくて。今となっては貴重な戦力で欠かすことができません。もちろん我々スタッフが障がい者の人たちが働きやすい環境を整えているからということもあるんですが、健常者にだって人によって向き不向きがあるわけですから、それは障がいがある人でも同じことだと思います。私自身、ここを始める前は障がい者の方々と一緒に働くという経験がなかったので、毎日毎日いろいろな発見をさせてもらっているという意味で、貴重な経験をさせてもらっています。

布施　私もこの冊子「メルディア」に関わることで様々な施設を見させてもらっていますが、毎回同じことを感じさせられます。出来る出来ないじゃなくて、向き不向きなんだなって。

働いていて楽しい職場が離職率を下げるための秘訣

この「キッズピアあしかが」で働いている知的障がい者スタッフにも話しを聞いてみた。

山田康寛さん（49）は知的障がいがある。以前は一般企業の工場で勤務していたというが、人間関係を理由にそこを辞めてしまったという。そして、3年前にここに就職した。もう一方の舩渡川史織さん（30）も知的障がいがある。彼女はここで働き始めて3年弱になるという。

布施　ここでの仕事はどうですか？　楽しく働けていますか？

山田　はい。スタッフもみんな良い人ばかりで、働くのが楽しいですね。

布施　なにか戸惑うこととかありますか。

舩渡川　接客業は初めてだったので、働き始めの頃にはいろいろと戸惑いがありましたが、周囲の人たちからアドバイスをしてもらえたので助かりました。それに、なんと言っても来場される子どもたちの笑顔に癒されることが多くて、それが一番嬉しいです。

山田さんや舩渡川さんらと一緒に働く健常者のスタッフ・持田千紘さん（25）は大学の保育学科で学んでからここに就職したと言う。

布施　障がいのある人たちと一緒に働くという道を選んだ理由はなんですか？

持田　大学の実習で障がいのある人たちと初めて関わりました。その時から、いつか障がいのある人たちと一緒に働きたいと考えるようになったことがきっかけです。

話を聞いている最中も3人は声を掛け合ったり、話に突っ込みを入れたりと、仲が良く楽しい職場なのだということが分かる。

布施　みなさんありがとうございました。私もこの冊子「メルディア」に関わるようになってから、多くの施設や職場を見て来ましたが、いつも同じことを考えさせられます。障がいの有る無しとかは全く関係なく、人にはそれぞれ個性があって、やりたいことも違う。だからこそ、個性を引き出してくれる環境と、楽しく働ける場所があることが大事なんだということ。みなさんの様子を見ていると、ここではそれが上手くマッチングしているんだと思います。またこれからも毎日、明るく、楽しく、無理なく頑張って、来場される子供たちを更なる笑顔にしてあげてください。

取材・布施博

▶写真左から布施博さん、舩渡川史織さん、山田康寛さん、持田千紘さん、阿由葉 洋平さん

障がいは個性。障がいのある人だからこそ発揮できる能力がある。それを活かせる場所と環境がもっとたくさんできることこそ重要なんだと思う。（布施博）

Alive

アライヴしようぜ!

最前線の生きるを見つける

多機能型事業所CSWおとめ 編

住所／〒329-0214栃木県小山市大字乙女625-2
☎0285-39-6088

栃木県南部、小山市に昨年オープンした「多機能型事業所CSWおとめ」には、地域住民と施設利用者が笑顔になれる交流の仕掛けが散りばめられていた。パンやケーキを買いながら、提供される美味しい料理を食べ、一緒にコンサートを聴き、楽しい時間を過ごす。利用者、地域住民、職員、利用者の家族といったそこにいる人たちの境が笑顔によって小さくなっていく。そんな魅力的な施設を作った原動力は、学校と職場との壁に苦しんだある教員の経験だった。

取材・文
末吉 利啓　栃木県足利市市議会議員 プロレスラー
1981年足利市生まれ。プロレスリングアライヴのプロレスラー。メキシコ修行後2009年にプロレスリングアライヴを旗挙げ。2015年に足利市議会議員選挙に出馬し初当選。関東若手市議会議員の会副会長。

「学校を卒業したけれど」生徒たちの就業先の現実

栃木県南部に位置する小山市は古くから養蚕が盛んな地域で、かつては周辺に多くの桑畑があった。そんな小山市でも南側、茨城県や埼玉県にも近い乙女地区に「多機能型事業所CSWおとめ」はある。CSWはCommunity Social Workの略で「地域福祉」を意味する。地域住民と障がい者が、自然に触れ合える開かれた施設を目指すという法人の姿勢を表している。

施設を運営するのは平成10年に設立された「社会福祉法人 パステル」だ。「楽しく働き・元気に遊び、豊かに住もう」をモットーに障がい者支援のために施設や仕組みを整備し、障がい者や地域に貢献し続けている。今では栃木県、茨城県で多くの施設を運営し、障がい者雇用のための事業所だけで7ヶ所に及んでいる。そんな事業所のひとつが平成29年5月にオープンした「CSWおとめ」だ。施設内にはグループホームが2棟、レストラン、農園等があり、いつも利用者とお客さんの笑顔が絶えない。特にレストランは人気で、美味しい食事を求め市内外からの来場者で賑わっている。

「せっかく学校で良い子に育っても就業先で挫折してしまう」と話すのは、今回お話を伺った同法人常務理事の社会福祉士・石橋須見江氏だ。養護学校などで健やかに育ち、いざ就業先に入職しても、現場の環境や訓練の仕方、先輩や同僚の接し方などにより自信を無くし、就業できなくなるケースを何度も見てきたと言う。須見江氏はもともと公立中学校の教員だった。その後、養護学校に勤め、平成9年には栃木県立足利中央特別支援学校の校長に就任した。現場で手塩にかけて育ててきた子どもたちが、挫折する姿を目の当たりにし、「そんな状況を何とか変えたい」との思いが、法人立ち上げの原動力になっていたようだ。

平成10年7月、夫である元福祉新聞社員の石橋俊一氏と「社会福祉法人 パステル」を設立した。翌年に須見江氏も校長を退任し、第一号の拠点となる「通所授産施設セルプ花」を栃木県野木町に開設した。パンや菓子類の製造販売をはじめ就労支援事業、グループホーム等の生活援助事業を開始した。その後、授産施設、グループホーム、生活介護事業所、障がい児通所支援事業所、多機能型事業所を次々と開設。その他にも障がい者向け職業訓練事業、ジョブコーチ支援事業など様々な事業を開始した。

社会福祉法人 パステル
常務理事／管理者
石橋 須見江
Sumie Ishibashi

レストラン「みゅぜ・ど・ぱすてる」は、食事を楽しむ人、お土産を求める人で賑わっている。月に一度行われるコンサートも盛況だ。

本気で障がい者と向き合う教育現場の視点が笑顔を生む

前述したように「多機能型事業所CSWおとめ」には様々な施設と役割がある。中心となるのは働くことを通して生きがいを見つけ、必要な訓練を行う就労継続支援事業だ。就労継続支援B型のため雇用契約は結んでいないが、レストランでの調理補助、会計、ホール接客、パンやケーキの計測、包装、桑とサツマイモがメインの農場での農作業、葉っぱの手入れなど仕事内容は多岐にわたる。農場で利用者が育てた野菜はレストランの料理に使ったり、サツマイモを加工して干し芋にしたり、桑の葉からクッキーやうどんにしたりと、生産、商品開発・加工、販売を行う6次産業にも取り組んでいる。これらの商品は外部からの評価も高く、施設はもちろん、近隣の道の駅でも販売されている。

利用者の得意不得意などによってそれぞれ担当が決められ、積極的に作業に携わっている。利用者の一人である斎藤一さんは1日のうち半分はレストランなどで働き、残りをイラストなどの創作活動に充てている。斎藤さんのイラストは好評で、商品化した干し芋のパッケージにも採用された。また、施設内のギャラリーに常設展示され、多くの来場者の目を引いている。

この他の施設として、生活支援や短期入所を行うグループホーム、障がいのある人とそのご家族向けの相談窓口であるライフサポートセンター、地域の方が利用できる交流スペースでもある地域交流センター、レストラン、ギャラリーなどが併設されている。

就労継続支援事業B型の利用者の皆さんについて須見江氏は、「もともとおとなしく、引っ込み思案で自信がない傾向にあった。しかし就労を通じて明るく、積極的で自信を持てるようになった。特にレストランホールなどは接客によって、直接お客さんから褒められたことがモチベーションに繋がったのでは」と話す。

ロボットや機関車が好きな斎藤一さんは、それぞれの作品を来場者に対して丁寧に説明してくれる。その発想力や精密さ、色使いのセンスに驚かされる。

また、須見江氏が長年の障がい者とのふれあいの経験から「利用者とは本気で接しないと信頼されない。利用者もこちらを見ている」と、職員に対する指導方針についても語った。利用者の悩みやつまずきと本気で向き合い、本気で理由を考え、本気で対応することが重要。そうすることで利用者も笑顔になり、仲間も増え、仕事も順調に習得できるようになるという。「この仕事はそういった人生観を教えてもらった事への恩返し」という須見江氏の言葉が印象的だった。企業出身ではない須見江氏の視点が、利用者の笑顔の源になっているように感じた。

更なるCSWの具現化 桑を使った農福連携

施設の課題について「利用者は入れ替わりが少ないため同時に歳を重ね、退職の時期を迎える。そのときに新たな生きがいをきちんと提供しなくてはいけない」と須見江氏。障がい者就労継続支援事業の場合、一般企業への就業を前提としてないため、退職しない限りその施設で働き続ける。他の施設でもそうだが、CSWおとめも立ち上げ当初からの利用者の多くが継続して働いている（※1）。そういった利用者が次々と仕事をリタイアしても、生きがいを持って生活できるようにしなくてはいけない。そのためにも絵や織物などの創作活動やパソコンなどの多様なコンテンツの整備をはじめている。そこには「ただ作る」、「ただやる」だけではなく、それを誰かに楽しんでもらったり、喜んでもらったりする仕掛けも必要になってくる。創作物の展示スペースはその一例だと思う。そこに訪れた人々から返ってくる反響こそ、生きがいに繋がる大きな要素になるはずだ。

また、今後の展開について「CSWを具現化した、地域に密着した施設、高齢者と一緒に話ができる施設にしていきたい。」と語る。その布石として、毎月レストランで行うコンサート（※2）に利用者家族や地域住民を呼んだり、交流センターを地域に開放したり、自家栽培の農作物を店先で販売してもらったりと、積極的な地域との交流を進めている。更に小山市と連携して、かつての特産物である桑の栽培を通じた様々な活性化を目指す「農福連携事業」を進めていくとのこと。桑の葉や実を使ったクッキー、お茶、うどん、パウンドケーキが店舗でも人気だ。今後はさらに桑の実を使ったマルベリーワインの製造販売を目指すため、ワインの研究や出荷に耐えうる量の桑を栽培するための農地確保などを進める。また、この事業は国の地域再生計画にも【「桑・蚕・繭・紬・和装・和食」地域資源で紡ぐ「日本の伝統を生かした総活躍のまち」づくり事業】として、認定と予算措置を受け官民連携の土台は整っている。

農場で桑を栽培し加工することで障がい者雇用を生み出し、耕作放棄地などを活用することで農業を振興し、養蚕による糸を利用した結城紬の製造に挑戦することで伝統産業継承にもつなげる。更には地域の高齢者が活躍する場も創出していきたいそうだ。

障がい者の仕事を生み出す施設が、多くの業界や地域に貢献することで、更に多くの笑顔を作り出してくれることを期待したい。

取材・末吉利啓

※1／平成11年に設立された「通所授産施設セルプ花」のパン作り部門が前身。そこで働いていた25名が部門ごと「CSWおとめ」に移動し、継続して働いている。
※2／パステルコンサートは毎月第3土曜の午後7時から同施設のレストラン「みゅぜ・ど・ぱすてる」で行われる。どなたでも入場可能。

M size エムサイズ

はじまり

＜水越けいこ 連載＞

7

シンガーソングライター
水越 けいこ

1954年山梨県生まれ。1978年「幸せをありがとう」でデビュー。TBSの朝の番組「8時の空」に田中星児と共にレギュラー出演。その後シングル「ほほにキスして」「Too Far Away」がヒット。現在はダウン症を持つ息子と二人暮らしをしながら音楽活動や講演活動を続けている。

まるで家族のような関係 子どもたちから教わった事

ダウン症の息子・麗良（れいら）と私とは2人暮らしが長いですが、まるで本当の身内のようにお付き合いしていただいているご家族が2つあり、今までに2人暮らしで寂しいと感じたことはありません。

どちらのご家族にもお子さんがいて、そのお子さんらが、麗良をまるで本当の兄弟や家族のように慈しみ、可愛がってくれています。

まずは1つ目のご家族とのお話です。そのご家族には長男、次男、長女の3人のお子さんがいます。長男・聡くん（仮名）が小学校の修学旅行に行った時のこと。聡くんは、自分の物は何も買わずに、自身の弟と妹、そして麗良にまでお土産を買って来てくれたのでした。

兄弟のように仲良くさせて頂いているとはいえ、まさか麗良にまでお土産を買って来てくれるだなんて思ってもいませんでした。

小学校の修学旅行といえば、持って行けるお小遣いの額も少ないはず。それを工面して麗良にまでお土産を買ってくれた聡くんの優しさと心配りを今でも決して忘れません。

現在では、当時小学生だった聡くんも成人し、ご本人、弟さん、妹さんも結婚され、それぞれに家庭を持っています。そうした今でも、麗良とは兄弟のように接してくれています。

2つ目のご家族のお話をしましょう。こちらのご家族には長女、長男、次男、3人のお子さんがいます。その次男・高志くん（仮名）は、麗良より2つ年下で、彼もダウン症です。麗良の方が年上であるせいか、高志くんのお兄さんの方が年上であるせいか、高志くんのお兄さんは的な存在になっています。

こちらのご家族には、私が地方への泊りがけの仕事がある時には、麗良を宿泊させて頂くことがよくあり、とても助かっています。

この宿泊の時が麗良の本領発揮の時です。高志くんはとても恥ずかしがり屋で引っ込み思案なタイプで、初対面の人に会うとお母さんの後ろに隠れてしまうほどです。しかし、麗良とは幼い頃からよく一緒にいたこともあってか、とても仲が良く、時には麗良にピッタリとくっついて行動することもあります。

麗良が他人に頼られている場面や、お兄さんのように振る舞う姿を目にすると、「ああ、麗良も少しづつ成長しているのだな」と感じることができます。

麗良の成長を支えて頂いた2つのご家族と6人の子どもたち。その優しさと愛情には、今でも感謝の気持ちでいっぱいです。

息子と私との初めての海外 新ミレニアムの「はじまり」

1999年の暮れから2000年の始めにかけ「ふじ丸」という大型客船の中で歌うという仕事の依頼が舞い込みました。日本を出発してグアム、サイパンを巡るという「ミレニアムニューイヤークルーズ」でのお仕事です。

お話を頂いた時、とても嬉しかったのですが、ひとつ大きな問題がありました。日本を離れ、2週間弱にも及ぶ船上での仕事です。その間、麗良を誰に預けるのか？　という問題です。誰かに託すにはさすがに長過ぎる期間です。

悩んだ末に、プロデューサー、このクルーズを運営する方たちに相談することにしました。

彼らに相談すると、「麗良くんも一緒に連れて行ってはいかがですか」、「私たちは最初からそのつもりでオファーしましたが」と、いともあっさりと、私の悩みなど杞憂のごとく軽く吹き飛ばしてしまうような回答を頂きました。

記念すべき年に開催される大きな仕事。しかも、親子揃っての初の海外旅行。期せずして頂いた幸運に心を躍らせたこの出来事は、まるで昨日のことのように思い返されます。

東京湾から出港した「ふじ丸」は、太平洋を目指して紺色のじゅうたんの上を滑るかのように静かに力強く進みます。海と雲との完璧なコントラスト、視界いっぱいに広がり弧を描く水平線。地球の大きさと丸さとを雄弁に語る、それは素敵な景色でした。

「ふじ丸」の中では3回のコンサートを行いました。そのうち1回はカウントダウンのセレモニー。300人の乗客、100人のクルー、そして私と麗良。全員で記念すべき2000年代への突入をお祝いしました。

南鳥島近海でミレニアムな新年を迎え、数日後にグアム、またその数日後にサイパンと、めくるめく船旅を満喫することができました。

私も含め、多くの方たちに共通することですが、人生という航海が何事もなく平穏に過ぎるわけではありません。時には大波や嵐が襲って来ることもあります。家族や友人を慈しみ、仕事に勤しみ、周囲を愛することにより、巡ってくる幸運や得難い経験がきっと誰にも訪れる時があると、私の経験からそう思います。

ミレニアムニューイヤークルーズの「ふじ丸」船上にて、私（水越けいこ）と息子・麗良。

水越けいこ「僕の気持ち」絶賛発売中！

大橋はるかの 福祉施設訪問

栃木県足利市 多機能型福祉事業所 らふ

地域住民の理解を得て、今では皆さんとの交流の場になっています。

取材・文
大橋はるか
タレント/モデル

施設利用を希望される方々がいつでも来所できるようにと、年中無休で営業しているのが栃木県足利市にある「社会福祉法人 渡良瀬会」が運営する「多機能型福祉事業所 らふ」です。建ってからまだ一年未満の施設は、外観だけでは福祉施設には見えないほどモダンでおしゃれな建物でした。

施設内設備のバリアフリー化はもちろん、椅子の形状にまで利用者に寄り添ったきめ細やかさが見てとれました。利用者、職員、地域の方たちの笑顔と交流の場にもなっている「らふ」の管理者・森田さんにお話を伺ってきました。

大橋　こちらの「多機能型福祉事業所らふ」とは一体どのような施設なんですか？

森田　日中の生活介護をしています。利用者さんが夜間ではなく日中に生活をする場所です。

大橋　みなさんはここで寝起きしている訳ではないのですね。

森田　はい。ここに通っています。

大橋　利用者さんの人数は？

森田　現在21名ですね。

大橋　21名でこのスペースって、かなり広々使えそうでいいですね。

森田　結構ゆったりとしていると思います。

大橋　通所されている方たちは、ここではどんな事をされているんですか？

森田　基本的に軽作業をしています。日中活動の一環で近辺の内職を請け負っています。

大橋　どんな内職ですか？

森田　カップの加工をしたり、シールを貼ったり、この隣の部屋ではお菓子などの箱を作っています。

大橋　お菓子の箱というのは？

森田　お中元やお歳暮などでよく見る、羊羹（ようかん）の詰め合わせを入れるような化粧箱ですね。以前、お中元を頂いたら、うちで作った箱に入っていた、なんてこともありました（笑）。

大橋　そういう内職仕事は誰でも簡単に出来るものなんですか？

森田　いや、そんな簡単にという訳ではないですね。個人によって得意な事が違うので、やってみてもらって、本人たちに向き不向きを判断してもらってから作業をやってもらっています。

大橋　出来ることをやればいいだけ、と。難しいことはないんですね。ところで、この施設を建てるにあたって、当初は地域住民の一部に反対があったと聞きましたが。

森田　そうですね。地域住民の方たちに向けた説明会を何度かさせてはいただいたんですけれど、障がいのある人たちに対する理解が浸透していなくて、反対があったことは事実です。説明会では色々な意見をいただきました。

大橋　でも今は、地域住民の方たちもいろいろと協力してくれるようになったとか。

森田　こちらから地域に出向いて、川の清掃やゴミ拾いなどを積極的に行っています。季節ごとにイベントを開催していて、もうすぐここが建って1年になるので、地域の方たちをお招きして「1周年感謝祭」を催します。手作りの焼きそばを提供したり、その他にも色々な催し物をやる予定です。

大橋　すごく楽しそう！　地域の方たちに開放しているスペースもあるんですよね？

森田　いつでも誰でも自由に使っていただける「交流スペース」があります。例えば、クリスマス会であったり、地域の会議だったり、趣味のコーラス会とかに利用していただいています。夏休みなんかは、お子さんたちが集まって宿題をやったり、自由研究をしたりと、多くの人たちに利用していただいています。

大橋　交流スペースを作ったきっかけは？

森田　私は物心が付いた頃から障がいのある人たちと触れ合う機会が多かったから、特に何も「障がい」が特別なこと、普通と違うことだなんて思わなかったんですね。でも、他の人だと、小さい頃から障がいのある人たちと触れ合うという機会は少ないはずなので、ここに来て実際に触れ合ってみて欲しいって思うんですよ。

大橋　それがきっかけになって「障がい」を理解することにも繋がりますよね。

森田　障がいのある人たちへの理解が進めば、「障がい」という括りというか、枠が取り払われると思うんですよ。だから、「利用者の為に」、「地域の為に」だけいろいろなことをやっている訳ではなくて、例え障がいと呼ばれる個性のある人たちでも、一人の人間として気持ちよく生きていて欲しいっていうのが全てですね。

大橋　なるほど。運営していくにあたって、大変な事もきっとありましたよね？

森田　そうですね。でも、私だけではどうにもならないんです。周囲の優秀なスタッフや地域の方たちが助けてくれたので何とかなりました。協力してくれた方たち全員に恩返ししなきゃなって思いますね。

大橋　交流スペースのような場所から障がいのある人たちへの理解が更に進むと良いですね。

多機能型福祉事業所 らふ
栃木県足利市小俣町 307
TEL / 0284-22-7104

渡邊希望の福祉施設取材

福祉事業所の利用者に聞いた
「多機能型福祉事業所 らふ」とは？

利用者に聞く。「らふ」は楽しく過ごすための場所

多機能型福祉事業所「らふ」の管理者である森田氏にお話を伺ったあとで、場所を同所内の「交流スペース」へと変え、森田氏、利用者の「セツ子」さん、筆者を交えた3人で改めて対談をさせて頂くことになった。

まず、セツ子さんに「らふ」を利用してみての感想を聞いてみた。

「ここに来るのは楽しいから。自分の好きな事ができて、楽しみなこともいっぱいあるから来てるんです」

セツ子さんのこの言葉を傍らで聞いていた森田氏は彼女に問いかけるように、「そうだったの？　初めて聞いた」と笑いながら言い、同時に、嬉しそうな顔を隠さなかった。

歌が好きだというセツ子さん。「らふ」の利用者の中で歌が好きなメンバーらと一緒に、よくカラオケ会を開くのだという。

「みんなと一緒になってカラオケをしている時が一番楽しい」と、セツ子さんは笑いながら言った。歌が好きだというだけあって、歌手名や曲名にとても詳しいようだ。セツ子さんが列挙した昭和歌謡の曲名や歌手名には詳しくない私に「こういう歌、知らない？」と、中でも一番好きだという女性演歌歌手の曲をアカペラで一節だけ披露してくれた。

この対談の中で、セツ子さんと森田氏の関係がよくわかる一幕があった。それは、3者での対談中に、森田氏が仕事のため中座した場面でのこと。森田氏が部屋を出ると、セツ子さんが森田氏について語り出したのだった。

森田氏の家族のこと、彼と食事をした時のこと、その他の様々なエピソード。

母が息子のことを語るように森田氏とのエピソードを話すセツ子さん。２人の関係性だけでなく、利用者とスタッフとの関係性が良く分かる。

セツ子さんの話しぶりはまるで、母親が自分の息子のことを誇らしげに語るかのような感じにも見えた。利用者と管理者という関係を超越して、いかに両者が互いを理解しているかの証明なのだろう。また、森田氏を始めとするスタッフの方たちの働きぶりや人柄、施設の居心地の良さを物語るに不足が無いエピソードだと感じた。

相手のことをよく知ること それが相互理解への第一歩

中座して戻った森田氏に、「この仕事のどこにやり甲斐を感じるか」と質問してみた。

「やり甲斐というよりは『やらなければいけないこと』だと思うからやっているんです」

一見すると厳しく現実的な答えにも思えるが、ここに福祉施設の管理者としての本質が見て取れた。「やらなければいけないこと」の前に、「誰かが」と補ってやれば分かりやすいかもしれない。さらに、「やらなければいけないこと」とは、「知的障がい者への理解」と読み替えればいいだろう。

多機能型福祉事業所らふの本体である社会福祉法人 渡良瀬会では、地域への奉仕活動や、地域の人たちとの交流事業、地域の子どもたちとの共同作業などを通じて、「知的障がい者への理解を深めたい」としている。

今回の対談で利用させてもらった「交流スペース」を一般利用者にも開放していることも含め、同系列の施設が運営する知的障がい者スタッフの働く「カフェ」など、知的障がい者と地域の人たち、子どもたちが交流し触れ合うことが可能な場所が非常に多く用意されている。

「知的障がい者への理解」とは、言葉にするのは簡単だが、編集部でも幾度となく直面し、深く考えさせられてきた難しい課題だ。極論となるかもしれないが、「『知的障がい者』という言葉が存在する時点で問題は解決しない」とまで語る人がいたのも事実である。

ここまで書いてみて同施設の名称について気付いたことがある。もし、英語の「Laugh（声を出して笑う）」が語源なのだとすれば、深い。施設利用者が「声を出して笑う」には、先出のセツ子さんのように「楽しい」と心から言えるような環境が必要となるはずだ。

「自分はまだまだですが、他のスタッフが優秀なので助けられています」と森田氏は言った。自身を語るのではなく、「他のスタッフが優秀」と言えるには、スタッフ同士の相互理解や相手の詳細な観察も必要となる。

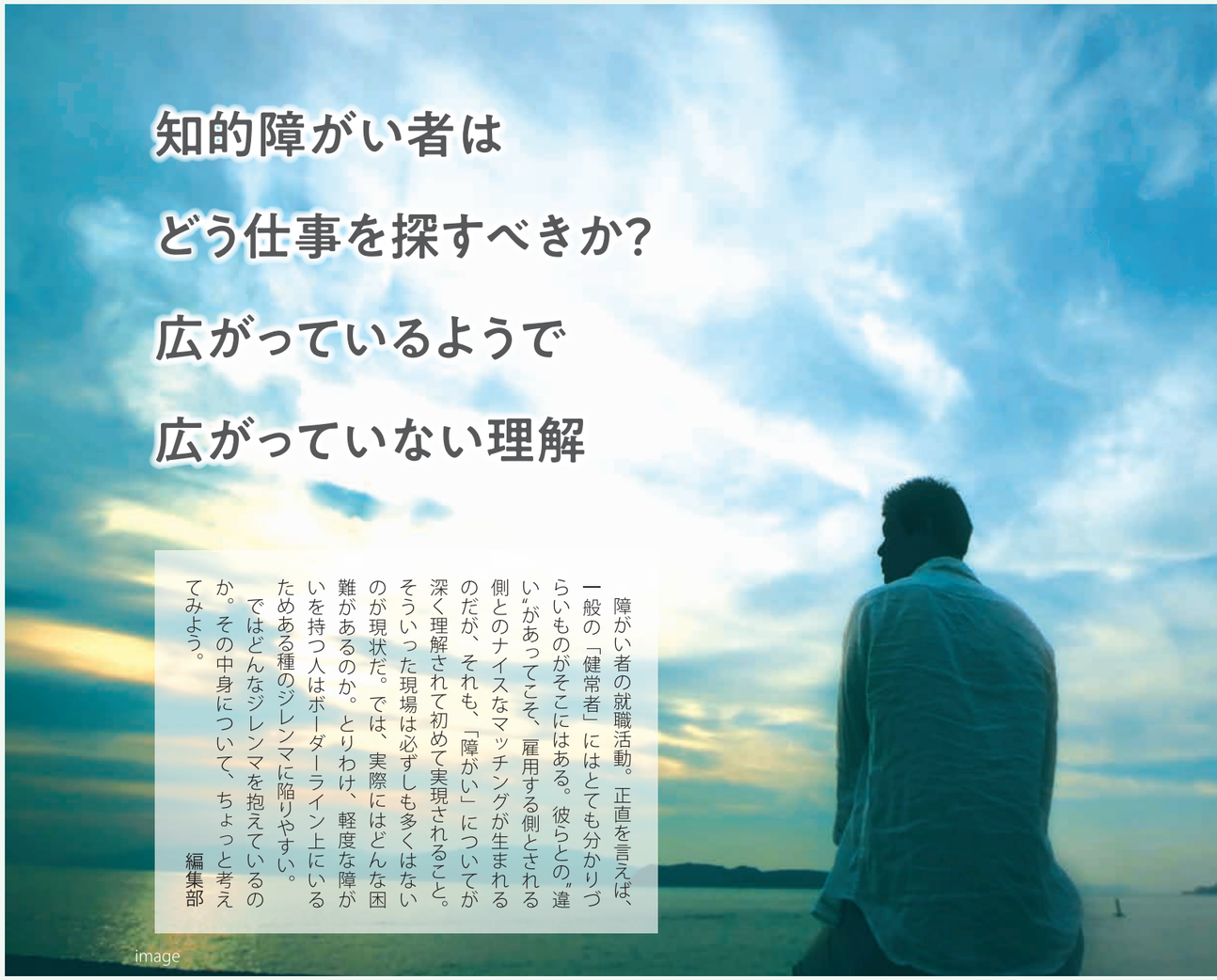
相手を良く見て、長所を見付け、能力を認め合う。相手に足りないことがあれば、自分が補ってあげる。逆もまた然りだ。時には単独ではできないことも両者の協力によって、成し遂げることが可能になる場合もある。そのために必要なのが「理解」なのだと思った。

森田氏は、10年以上に渡って知的障がいについての勉強を続けているが、自身を「まだまだだ」と言う。彼の目標は、「知的障がいがある人を社会的に一個人として認められるようにすること」なのだという。その言葉は、彼の目指す先にそびえる峰までの道程が、険しく、遠いからこそ、常に前進しなければならないという自身に対する叱咤から出た言葉なのかもしれない。

渡邊希望

10 年以上「知的障がい」について勉強しているが、経験も実践も「自分はまだまだだ」とストイックに語る森田さんの言葉には重みがあった。

知的障がい者は どう仕事を探すべきか? 広がっているようで 広がっていない理解



障がい者の就職活動。正直を言えば、一般の「健常者」にはとても分かりづらいものがそこにはある。彼らとの〝違い〟があってこそ、雇用する側とされる側とのナイスなマッチングが生まれるのだが、それも、「障がい」についてが深く理解されて初めて実現されること。そういった現場は必ずしも多くはないのが現状だ。では、実際にはどんな困難があるのか。とりわけ、軽度な障がいを持つ人はボーダーライン上にいるためある種のジレンマに陥りやすい。

ではどんなジレンマを抱えているのか。その中身について、ちょっと考えてみよう。

編集部

順調に見える障がい者雇用 しかしそれだけでいいのか

平成29年版の『障害者白書』によれば、民間企業における障がい者の雇用は13年連続で過去最高を更新し続けている。身体・知的・精神障がい者ともにその数字は前年よりも増加しているので、障がい者が働くための環境は確実に整ってきていると言えるだろう。さらに厚生労働省は、2017年5月に民間企業に義務付けている障がい者の法定雇用率を段階的に引き上げていくことに決めたので（今年の4月には2.2%にし、2021年3月末までには2.3%まで引き上げられる）、今後、さらに障がい者の雇用環境は整うことになるはずだ。

この数字が高いか低いかはここでは置いておくとして、まずは歓迎すべきことだ。だが、法定雇用率達成企業の割合を見れば約50%程度。つまり、半分の企業は達成できていないという現実がある。しかも、従業員数の少ない企業ほど達成率は下がるので、雇用の受け入れ先は自然と限られて来るというのが現実とも言える。やはりそこには困難が横たわっているのだ。

こうした統計数字には表れないものの、知的障がいの、とりわけ軽度の知的障がい者の場合だと別の困難もあるようだ。就職活動を始めるにあたって、一般雇用と障がい者雇用のどちらを選択するかという問題だ。

障がい者の就労支援には就労支援施設が経営する支援事業には「A型」、「B型」の経営形態があり、障がいの軽重や賃金の多寡がそれによって分かれる。

特別支援学校に通っている人なら、おそらく自然な流れで障がい者雇用を選ぶだろう。ところが、軽度な人であれば健常者と同じ学校に通い、やはり自然な流れで一般雇用を選ぶことになる。もちろんそこには自身や家族の気持ちの問題もあるだろう。療養手帳を取得してそれに頼る必要もなく、なに不自由なく健常者と同じに働けるはずだ、と。

だが、就職活動は厳しいのが現実だ。それは健常者か障がい者かの区別なく、単にシビアな面接官のお眼鏡に適わなければ、誰でも落とされてしまうものだ。ましてや、軽度でも知的障がいがあることを伝えたとすれば、「一般雇用」においてはマイナス加点されてしまうのが現実でもある。仮に就職できたとしても、健常者でも会社の人間関係に悩んで鬱になる人がゴマンといるのがこの世の中だ。そこには過酷な現実が待っていると言わざるを得ない。

障がい者雇用も選択肢の一つ 柔軟な発想が求められる

では、軽度な知的障がいのある人たちは一般雇用を諦めるべきかと言えばそうではない。それは個人の自由でもあるし、本人や家族の意向を尊重するべきであるから。ただ、現実をシビアに考えた場合、あくまでも「選択肢の一つ」くらいに余裕を持って障がい者雇用を捉えるのも一つの前向きな発想なのではないだろうか。

障がい者雇用を選んだ時に、今までは敢えて取得していなかった療養手帳が必要になってくる。その場合、IQ70～75以下であることや、日常生活に支障が生じて特別な支援が必要な状態であるといった判断条件が課されることになるが（自閉症などではIQ91以下と診断される場合もある）。

そこで、知的障がい者が就労支援を期待した場合、3つのメリットがあると指摘されている。

①工夫された訓練による能力向上

②個々に合わせたプログラムとスケジュール

③就職活動・就職後もサポート

障がいがある人にとっては、個人の意志だけではどうしようもなく、周囲のサポートが必要な場合もある。ならば、行政が後押しするこういうサポートを今一度見直すのも一つの手であり、選択肢の一つなのではなかろうか。

知的障がいのある人の就労については、必ずしも正確な数字ではないが、およそ10数%の人が、結局は今ある職場を離職しているという数字もある。知的障がい者に関してだけ言えば、その統計数字もまた違ってくるのかもしれないが、離職の原因が主に「人間関係」や「作業能力」、「コミュニケーションスキル」によるそうで、それも、本人の特性に対する勤務内容が、そもそもミスマッチなのではないかと疑われる。

適材適所。本誌で様々な取材をしたから思う事なのだが、それが本当に実現されることが何よりなのだと思う。

（編集部）

※イメージ「HPより」

知的障がい者と一緒に「ものがたり」を紡(つむ)ぐ

つむぐ

前号の「つむぐ」では、栃木県足利市にある「こころみ学園」を取材し、
その歴史や背景を題材に、一編の物語を書きました。
実は、その取材の際に本企画に協力してくれた方がいました。
今回は、その方を紹介しつつ、もう一つ新しい物語を紡いでみたいと思います。

取材・文
渡邊 希望 脚本家・俳優

1988年神奈川県生まれ。大学時代に現代小説を専攻。2015年「劇団ショートホープ」を立ち上げる。活動は脚本家と俳優に留まらず演出家としても活躍し、音響も手掛けるなど、多岐に渡って才能を発揮する。

※イメージ「HPより」

※イメージ「HPより」

こころみ学園でワインを造る それが人生だと語る山田さん

今回、「つむぐ」に協力してくれたのは、山田孝夫さん。「こころみ学園」の古くからのメンバーで、他の人たちと同じようにワイン造り、シイタケ栽培、農作業などに従事しています。

同学園の事務局長・佐井さんから、「自分のことを話すのがとても好きな人」だと事前に伺っていました。いざ、お話しをしてみると、まさに佐井さんが言う通りの方でした。好きなこと、嫌いなこと、悲しいことを、喜怒哀楽に合わせた表情と、身振り手振りで多彩に表現をしながら話す山田さんがそこにいました。

山田さんと実際に話してみて分かったことがあります。彼は、どんな話題に対しても好き嫌いを明確に答え、その理由を細かく説明してくれることです。彼の好き嫌いの表現方法は独特でユニーク。何かを表現する能力に長けた人なのだろうと思いました。役者が本業である私も、彼の持つ豊かな表現力には舌を巻きます。

彼は、「生きるとは何か」ということをよく考えるそうです。「自分の中でまだ答えは出ていない」としながらも、「今の自分にとっての『生きる』は、こころみ学園でワインを造ること」だと、強くはっきりと言い切りました。

この言葉を聞いてすぐに、今回の物語の軸は『何か一つを考える話』にしようと思いました。彼のように、一つのことを深く考える事の楽しさや、はたまた面倒臭さなど全部をひっくるめて、一遍の物語を紡ごうと決めました。

山田さんと紡ぐ「ものがたり」 彼の「在り方」と「考え方」

今回の物語を書くにあたって私に必要だったのは、山田さんが使う言葉そのものです。彼が発する言葉の全てには、彼なりの真理が内包されているように私には聞こえました。決して適当に言葉を発することをせず、的確に正しい言葉を使うあたりが、とても興味深く、彼の一言一句を聞き漏らすまいと傾聴することで精一杯でもありました。

物語の中で使う表現には、「山田さんが喋る言葉の魅力をそのまま届けられるようにしたい」と考えました。私は基本となる設定だけを考え、文章の中には彼の言葉を出来るだけ脚色しないで使うことにしました。彼と紡ぐ物語は、それだけで面白いものになるはずだと確信したからでした。

今回のキーワードは、「虫」と「知識欲」と「本嫌い」。この3つを選びました。

「虫が嫌いだ」と山田さんは言いました。嫌いである理由を取材の時に語ってくれましたが、それがとても面白く、物語にそのまま載せたので、是非ご一読いただければと思います。

「知識欲」は、山田さんを表すのに一番端的な言葉だと思ったからです。彼は、物事や事象を「好き」か「嫌い」かで明確に分けているだけでなく、なぜそれを自分が「好き」なのか、なぜ「嫌い」なのか、という確定的な理由も持っています。理由まではっきりと説明できるのは、自身の心理の根源を知りたいという、哲学的とまで言える純粋な知識欲が存するはず、と思ったからでした。

「本嫌い」は、山田さんが自身を称しての言葉です。これが、今回の物語の肝となりました。本というのは他人が探究した知識を現した物です。自分でなく、他人が導き出した真理なんて、彼には受け入れ難いものなのかもしれません。

物語は、私が山田さんに宛てた感想文でもあります。語弊があるかもしれませんが、彼の「可愛らしさ」が伝われば良いと思います。

取材に協力してくれた山田孝夫さん。写真を撮るのも好きなようで、ネコの写真は全てネコが寝ている時の顔のアップばかり。ネコへの深い愛情を感じました。

全てにおいて一つ一つを大切にするような人
山田さんの持つ世界観とそれが紡いだ人生観

「つむぐ」では、筆者の渡邊希望と対談して頂ける方を募集しています。ご本人はもちろん、ご家族や周囲の方からの応募もお待ちしています。

山田さんは、自分にとって大切な日を西暦や日にちだけでなく、曜日、時間まで正確に覚えています。彼の持つ特殊能力です。細かい日付を添えながら、彼は自分の今までの人生についてたくさん語ってくれました。そんなエピソードは臨場感にあふれ、彼の人柄も相まって、話していてとても楽しかったです。

そんな山田さんが、自分の人生を指して「多分幸せ」だと言っていました。多分と付け加えた理由ももちろん語ってくれました。それは、「幸せかどうかは最後に気付くものだから」なのだそうです。素敵だと思いませんか？　私は人生の送り方について、彼に見習うべき部分があると強く感じました。

■お便りのあて先／お問い合わせ　〒163-0632 東京都新宿区西新宿1-25-1 新宿センタービル32F
一般財団法人「メルディア」事務局／担当 鷺坂
TEL : 03-5381-3213　MAIL : prd@san-a.com

募集&告知

各種募集と告知

知的障がい者向けの就労情報や各種告知と募集を掲載しています。
布施博または大矢真那が取材に伺う「訪問先」も募集しています。

布施博&大矢真那の訪問先／取材先を募集しています

知的障がい者を雇用する企業や団体、知的障がい者施設、学校、場所、スポーツ会場などへ布施博または大矢真那が直接お伺いして取材させていただき、本誌にてご紹介いたします。

■応募条件
知的障がい者を雇用している（雇用予定を含む）企業や団体、知的障がい者施設（学校を含む）、知的障がい者が活躍されているスポーツ団体、スポーツ大会、地域、場所など
■お問い合わせ
下欄にある「一般財団法人メルディア」事務局まで電話またはメールなどにてご連絡ください
※取材に関して費用等は一切かかりません

募集や告知などの情報を無料で掲載しています

一般財団法人メルディアが発行する「月刊メルディア（本誌）」では、障がい者を雇用する企業や団体、各種の養護施設または学校などの募集ごとや告知などを無料で掲載しています。「知的障がい者を雇用したい」「障がい者施設で開催するイベントを告知したい」などがありましたら、下記の一般財団法人メルディア事務局までお問合せください。

一般財団法人メルディアの活動方針ならびに本誌の編集方針にそぐわない内容、冊子の配置協力をお願いしている各企業の基準に抵触する内容、営利目的のみの内容、特定の宗教や信条に関わると判断される内容、反社会的と判断される内容、公序良俗に反する内容等については掲載をお断りする場合があります。あらかじめご了承ください。

一般財団法人メルディアへのご支援とご協力を募集

障がいのある子供を持つ親の苦労や将来への不安は、他の人には計り知れないほど大きなものがあります。さらに、それが寡婦・寡夫家庭であった場合、経済的な負担、苦労、不安なども一人で背負わねばならない状況に置かれることもあります。

私たち「一般財団法人メルディア」は、会報誌「月刊メルディア」を通じて、誌上に厳選した有益な情報を掲載することで、周囲との情報交換もままならずに不安を抱える人たちの情報源として、その一助となれることを目指しています。

私たち「一般財団法人メルディア」の活動に対するご支援（取材協力・協業の相談・各種支援・支援金・寄付）など、当財団の趣旨に賛同してご協力を頂ける企業・団体・個人を募集しています。下記にある当財団の事務局までご相談ください。

お問い合わせとご相談はこちら　一般財団法人 メルディア

〒163-0632　東京都新宿区西新宿 1-25-1　新宿センタービル 32F
一般財団法人メルディア 事務局／担当：鷺坂（さぎさか）宛て
TEL : 03-5381-3213　／　MAIL : prd@san-a.com

一般財団法人
MELDIA

■知的障がい者を雇用する（雇用予定を含む）企業、団体、各種の養護施設や福祉法人・団体の催事やイベントなどの情報掲載を希望される場合は、一般財団法人メルディア事務局までお問い合わせください。　■本誌の設置協力を頂いている企業や団体による設置前の「事前審査」により、掲載が不可能な場合もあります。掲載ガイドラインや記事のフォーマット等に関しましても一般財団法人メルディア事務局までお問い合わせください。

イベント情報&店舗情報など

知的障がい者が働く企業・団体からの情報や告知

知的障がい者が働く施設や団体のイベント情報、その他の情報または
各種の告知を掲載しています。

Cafe

ここからはじまるつながるひろがる笑顔「コミュニティーカフェよこまち」

■場所
栃木県足利市葉鹿町735-1
TEL：0284-63-2300
■営業時間
8:00～16:30（L.O.16:00）
■定休日
日曜、月曜、祝日
■ホームページ
http://yokomachi.watarase-kai.jp/

毎月第3日曜日に「足利流こども食堂　ふれ愛よこまち」を開催しております。地区社協、育成会、民生委員児童委員など相談体制を整えたこども食堂です。ぜひお越しください。

Playground

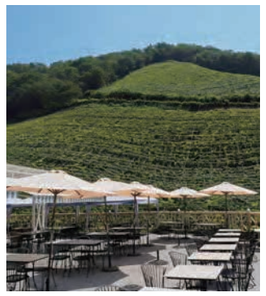
足利市屋内子ども遊び場「キッズピアあしかが」

■場所
栃木県足利市朝倉町2-21-16
ヨークタウン足利2階
TEL：0284-64-8650
■営業時間
9:40～17:40（80分入替制）
■ホームページ
http://mutumikai.ecnet.jp/kidspia/

子どもから大人まで、こころ・頭・からだを思い切り使って遊べる施設・キッズピアあしかがは、様々な願いや成長・創造を組み合わせた施設となっています。

Cafe

開墾60年目の葡萄畑を眺めながら「ココ・ファーム・カフェ」



■場所
ココ・ファーム・ワイナリー
栃木県足利市田島町611
TEL:0284-42-1194
■営業時間
11:00～17:30(L.O.)
■ホームページ
https://cocowine.com/

カフェでは、こころみ学園栽培の新鮮野菜やハーブ、足利マール牛など地元の農産物や旬の素材を使った季節のお料理を自家製ワインとともにお楽しみいただけます。

Design Your Life
MELDIA
GROUP
同じ家は、つくらない。

メルディアグループ
http://www.meldiagroup.com/

株式会社三栄建築設計
〒163-0632
東京都新宿区西新宿1-25-1
新宿センタービル32F

25th ANNIVERSARY
まだ25年、
これからのメルディア

07 MELDIA CONTENTS 2018 JUL.

01｜知的障がい者を応援！
コミュニティーカフェよこまち 編

06｜一般財団法人メルディアとは？
メルディアの基本理念、財団概要、支援事業

07｜布施博が訊く
キッズピアあしかが 編

11｜アライヴしようぜ！
異色のプロレスラーが最前線の「生きる（アライヴ）」を取材

15｜水越けいこ連載「M size / はじまり」
水越けいこが愛息・レイくんとの日々を綴る

17｜知的障がい者施設訪問
多機能型福祉事業所 らふ 編

21｜THE 取材！
知的障がい者の就職活動について

23｜つむぐ
知的障がい者と一緒に「ものがたり」を紡ぐ

27｜イベント情報と店舗情報
知的障がい者が働く施設や団体が行うイベント情報とお店情報

28｜募集と告知
取材先募集と協賛の募集など

MELDIA 7 月号　2018 年 5 月 25 日発行
発　行　元　／　一般財団法人メルディア事務局
発　行　人　／　小池信三
編　　集　／　株式会社サン・オフィス
編　集　人　／　東宮恵美
編　集　長　／　山口慎市
進　　行　／　東宮恵美、山口慎市、谷田貝亘介（新村印刷）
編　集　部　／　東宮恵美、都筑亮太、村田保則、渡邊希望
ライター　／　水越けいこ、布施博、大矢真那、山口慎市、渡邊希望、横関寿寛、大橋はるか、末吉利啓
カメラマン　／　吉岡晋（PHOTO MIO JAPAN）、渡邊希望
ヘアメイク　／　鳥取まりこ、山田裕美（キムラ美容室）
デザイン　／　有限会社フレッシャー・アド
印刷製本　／　QREAS株式会社
協　　力　／　MELDIA GROUP 株式会社三栄建築設計、榎本喜明（三栄建築設計）、社会福祉法人 渡良瀬会、コミュニティセンターよこまち、柏瀬旬、社会福祉法人 足利むつみ会、阿由葉寛、キッズピアあしかが、阿由葉洋平、社会福祉法人 パステル、CSWおとめ、石橋須見江、社会福祉法人こころみる会、指定障害者支援施設こころみ学園、有限会社ココ・ファーム・ワイナリー、佐井正治、越知翔子、多機能型福祉事業所 らふ、森田康太郎、有限会社瀬谷新聞店、瀬谷直人、株式会社TDPミュージックパブリッシャーズ、PHOTO MIO JAPAN、新村印刷株式会社

※敬称略／順不同

本誌の無断転載・複製を禁じます
2018ⓒAll Rights Reserved. 一般財団法人メルディア＆月刊メルディア
MELDIA GROUP 三栄建築設計／サン・オフィス

次号予告
MELDIA VOL.8
2018 年 6 月 25 日
発刊予定

一般財団法人 メルディア
〒163-0632
東京都新宿区西新宿 1-25-1
新宿センタービル 32F
一般財団法人 メルディア 事務局
TEL : 03-5381-3213
MAIL : prd@san-a.com